

## REPORT 縁農交差点 「総合的な学習」と農業

### 教師集団で取組む総合学習

2001年度から本格的に実施される「総合的な学習」は、教科教育の枠を乗越え、総合的な学習に見合うテーマを選定し、実施していく学習である。学校によっては、学級ごとに総合的な学習の内容に見合う内容を担任教師が実践しようとするところもあるが、最低でも学年で共通したもの、あるいは学校全体で共通したテーマで、学校のすべての教職員が関って取組んでみたい学習である。

現在の学校教育では、各クラス、あるいは各教科というまとまりのなかで教育実践が行われているが、その学校の教師がお互いの主体性のもとに、教師が協力しあって、一つのことに時間をかけて、共通のテーマで教育実践を行なっていく機会は意外と少ない。もちろん、全校をあげての運動会・文化祭という行事を一つの教育実践としているところは多いが、行事ではなく、具体的な内容のある教育の内容を、教師が集団的に知恵を出しあって、創りあげていく場は、これまであまりなかったといっても良い。

一つの学校の規模となると、教員集団の主体性を大事にしながら、教育内容をまとめていくのは、非常に難しいところではある。しかし、逆にこれを機会に、教師が集団的に一つの教育実践を創っていく試金石になるのではないかと思う。

普段は学級王国、教科教育王国の中にあって、お互いの教育の姿を見合うという機会はなかなかないが、この機会に教師どうしの教育実践に関する得意技というか、力量をお互いが認めあい、それを有効に利用する場として総合的な学習を活用してしまえば良いのだと思う。いわば子どもたちに対して、先生たちもすごい力をもっているのだぞという姿をはっきり見せることだ。

### 地域が集団的に取組む

教育の内容を創る教師の側だけでなく、農業が総合的な学習のテーマになるのであるならば、その素材を提供する農業関係者の側も集団的に取組むことが重要ではないだろうか。

以前、北海道の女満別町で農業体験を主体とした修学旅行を実施したことがある。受け皿の女満別町では、農家を中心となって、受入れのための実行委員会が結成された。この実行委員会には、農家が声をかけて、役場、高校、農協、社会福祉協議会、ボランティア団体などが集まり、農業体験の内容をつくっていった。

お互いが一つの目標に向かって、町の自然の姿と住んでいる人間の素晴らしさを知ってもらうための企画には、様々なアイデアが出された。「北海道の農業だから、トラクターに乗ってもらわないと」とか、「北限の稲作を知ってもらおう」、「チャンチャン焼きを食べてもらわなければ・・・」、また、同世代の高校生の目で町を見てもらうために、高校生との交流も大事だとか・・・。

それほど人口の多い町ではないので、多くが顔見知りではあるが、それまで連携することのなかった人どうしが、集まって、時には日付が変わる時間までアイデアを出し合いながら、動いていった。私も下見などで何度も実行委員会に参加したが、そうした地域の教育力を活性化させる可能性を総合的な学習はもっていると感じた。

### 感動のある体験が重要

こうした地域の教育力と教師集団の教育力が結びついた総合的な学習は、結果として、その学習に参加した子どもたちに学習内容に対する大きな感動をよぶ。同時に、教師の側は、教師集団の力にも感動するだろうし、地域も地域の教育力に感動するわけである。

その感動はまずは、ちょっとしたそれに参加する個々人の感動からスタートするのではないだろうか。筆者は、そのきっかけを雄大な女満別町の空から見た畑に感動し、トラクタ-に乗り込み、指導を受けて、1町の畑のロータリーがけした体験の中で感じた。そして、仕事がおわった後の、友人たちの笑顔が教育への活力となった。教師の有意義な農の体験が総合的な学習の第一歩である。